

『抄録』

(演題) 『義歯の咬合を考える』

近年、超高齢社会を迎え高齢者歯科医療と共に在宅歯科医療も増加傾向になって来ているようです。厚生労働省の歯科保健医療のニーズ動向によると、在宅歯科医療・高齢者歯科や摂食・嚥下といった高齢者歯科医療の充実が求められ、義歯の質的需要が高度化して来ています。また、歯科医療現場も高度に発達した歯科医療技術の進歩により、歯が喪失した無歯顎者の疾病構造も著しく変化してきていると思われます。義歯製作もより簡便で、客観的な根拠から効率的な“二義的人工臓器義歯”の製作システムとなる供給体制が求められています。

そこで今回の生涯研修では、無歯顎の臨床を行う上で最も重要な要素である印象採得から得られた臨床模型体と、咬合採得から得られた咬合位（垂直的・水平的下顎位）について臨床学的に考察したいと考えています。有床義歯を成功に導く鍵は、歯科医師による正しい印象採得と咬合採得にあると考えています。また同時に、症例を担当する歯科技工士も歯科医師の診断と治療計画をよく熟知したうえで、各ステップを慎重に進めなければならないと思います。印象体を大別すると、概形印象体と機能印象体に分類されると考えます。概形印象体により解剖学的組織が印記された印象体から得られた概形模型に正しく外形線を設定し個人トレーの製作を行います。模型上に表現された組織を十分熟知して、模型分析することが重要となります。

次に仮想咬合位 (Tentative Bite) と仮想咬合平面 (Tentative Occlusion Plane) の考察が大切になります。通常義歯製法では、機能印象体から得られた模型により、咬合床 (Bite Rim) を製作し咬合採得されています。

今回、紹介するシステムでは、従来法と異なり、仮の咬合高径による概形模型を咬合器に装着し閉口機能印象用の個人トレーを製作します。

近年、無歯顎治療の最終印象は閉口機能印象採得法により、患者固有の筋圧および粘膜の生理学的機能によって形成されるデンチャースペース (ニュートラルゾーン) の位置および咬合高径 (下顎位) が比較的正確に決定される。特に最近では、臨床上有効な術式として臨床応用されて来ている。デンチャースペースと義歯床との関係は、周囲筋組織と調和した下顎の小白歯部で最も巾が狭くモダイオラスを中心に交差 (クロス) した筋肉の集合部で、義歯床が浮き上がらない人工歯排列ゾーンと咬合様式が重要であると考えます。異なる臨床症例に対する咬合平面の設定基準とデンチャースペース内に安定した人工歯排列を行い、口腔内に調和した咬合と様式を与えることが重要であります。

セミナーでは、義歯の製作ポイントについて時間の許す限り聴講して戴いた皆様と共にディスカッションし生涯研修が有意義に出来ればと考えています。